

月刊 ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊37年目 **Nr. 419**

2025年2月号



Marc Chagall Schlafende mit Blumen, 1972 146 x 118 cm, Öl auf Leinwand ALBERTINA, Wien – Sammlung Batliner © Bildrecht, Wien 2024

杉本純の原子力の話II ウィーンと京都

152

日本原子力学会には、原子力技術の維持伝承さらに発展に経験豊富なシニアの責任ある活躍と、他世代、次世代への意味ある貢献を目的としたシニアネットワーク連絡会がある。連絡会にはシニアのみでなく、この活動に積極的に連携できる中堅世代も参加している。若手、特に学生が原子力を正しく理解し、自分たちの問題として考え、進んで原子力の世界で積極的に貢献していこうという気概を持ってもらうため、シニアと学生との対話会が、本ネットワークの代表的な活動である。これまでに、大学や高専と二〇年間に三〇〇回近くの対話活動を実施し、参加した学生は七千名を超えている。



東京都市大学における対話会の様子

一月十一日(土)午後、東京都市大学世田谷キャンパスにおいて「対話イン都市大学二〇二四」が開催された。二〇年前に記念すべき第一回対話会がここで開催されている。東京都市大学から学部一年生二名、二年生四名、三年生、修士一年、東京科学大学修士二年各一名、計九名の学生が参加した。シニアからは、早野睦彦(元三菱重工)、松永一郎(元住友金属鉱山)、石川博久(元原子力機構)、星野知彦(日本原電)、デブランコ真子(日揮グローバル)の各氏と筆者の計六名が参加した。第一回対話会に学生側担当者だった羽倉尚人准教授(都市大)がオブザーバとして参加した。

第一回対話会にシニア側担当者だった松永氏による開会挨拶では、今年策定される第七次エネルギー基本計画に「原子力を積極的に活用」との言葉が入り、学生がこれから活躍する場が大きく拡がることに触れた。続く早野氏による「日本のエネルギーの現状と課題〜原子力の役割と将来〜」と題する

基調講演では、社会に生きるからにはリスクと共存する覚悟と決意を持つとともに、冷静に次世代革新炉を見つめて欲しいとの期待が述べられた。質疑応答では、原子炉の寿命と新増設の関係や日本の原子炉の輸出可能性等に関するポイントを突いた質問があった。続いて三グループに分けて対話を行った。対話一では、三グループとも「第七次エネルギー基本計画」を共通テーマとし、対話二ではグループAが「エネルギー・原子力の現在の情勢」、グループBが「核融合の現状・稼働」を各テーマとして、学生がモデレータを務めて対話を実施した。対話後には結果をまとめてグループ毎に学生から発表した。一つのグループでは、生成AIを用いて発表資料を作成したと報告され、新しい時代を感じた。最後に星野氏より、講評と閉会の挨拶が述べられた。学生が最初から最後までリーダーシップを発揮して対話会を企画運営したこと、自主的なテーマ設定と仲間やシニアと積極的に議論する高い意欲が評価された。この後、別階で懇親会が一時間開催され、原子力の話はかりでなく、今後の進路や学生生活趣味などの話に花が咲いた。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生息する動物(その七)を紹介したい。先月に引き続き、ウィーン市の南東から北西に向かって流れるドナウ川周辺に生息する水鳥のうち、サギ類について述べたい。アオサギはドナウ川沿いで最もよく見られる大型のサギ。鋭いくちばしで魚、カエル、小型哺乳類などを捕食。浅瀬で静かに獲物を待ち、素早く捕らえる捕食スタイルが特徴。ダイサギは純白の羽毛が美しい大型のサギ。主に魚や小型の無脊椎動物を捕食。浅瀬で長い脚を活かしてゆつくり歩きながら獲物を探す。コサギはダイサギより小型で、全身に白い羽毛。浅瀬で小魚やエビ、昆虫を捕食。俊敏な動きで水中を歩きながら獲物を追う姿が特徴的。ゴイサギは夜行性の中型サギで、昼間は木陰や茂みに隠れて休む。小魚やカエル、昆虫を捕食。背中が黒、翼が灰色、体の下部が白の独特な配色。アカアシギは、体は光沢のある赤褐色、湿地や川辺に生息する中型サギ。ドナウ川沿いでは渡りの時期に見

られる。サギ類はドナウ川の豊かな水辺環境に依存し、魚類や無脊椎動物を食べることで生態系のバランスを維持している。

一方、京都市内を北から南に流れる鴨川周辺に生息するサギ類のうち、アオサギは日本最大級のサギで、体長約九〇センチ。全身が灰色で、首が長く、飛ぶときは首をS字に折りたたむ。頭部の黒い冠羽が特徴的。主に魚を餌とし、じっと動かさず待ち伏せして捕食することが多い。一羽で行動していることが多いが、繁殖期にはコロニーを作る。コサギは体長約六〇センチで真つ白な体色が特徴。くちばしは足は黒いが、指先が黄色いのが目印。浅瀬で泳がず、水辺を歩きながら鋭いくちばしで小魚やエビ、カエルなどを捕食。ダイサギは体長約九〇センチ、白色の羽毛を持つ。繁殖期にはくちばしが黒くなり、目の周囲が緑色を帯びる。浅瀬や川岸で小魚やカエルを捕食。冬季に多く見られる。ゴイサギは夜行性のサギで、やはずんぐりした体型。成鳥は青みがかった黒い背中と白い腹部を持ち、頭部には二〜三本の白い冠羽。若鳥(幼鳥)は茶色で、体全体に白い斑点。小魚、エビ、昆虫などを主食。鴨川周辺で最もよく見られるのはアオサギ。大きく灰色の体色は目立ち、鴨川の河原や浅瀬でじっと佇む姿は象徴的である。

余談であるが、筆者は昨年十月にシニアネットワークに入会し、対話会は今回が初参加だった。学生の行動力と積極的な発言が印象的で、我が国の将来は明るいと感じた。ウィーンではドナウ川河畔からアオサギを観察したことがある。京都でも鴨川沿いを散歩中にアオサギに遭遇した。近くで見ると思ったより大きい。今月も両地に生息する動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ドナウ川河畔に佇むアオサギの写真を掲載させていただく。



余談であるが、筆者は昨年十月にシニアネットワークに入会し、対話会は今回が初参加だった。

■ 杉本純 元京都大学教授

元原子力機構ウィーン事務所長 ■

